

白澤異聞

ポストマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

麒麟が語る白澤の昔話

それは白澤の友達の話だった

目次

白澤異聞

1

白澤異聞

その日は、珍しいことに麒麟様、鳳凰様、鬼灯様がそろって薬を取りに来た。

「…という訳で、今白澤様はいないんです」

「まったく、あいつは相変わらずだな」

麒麟様は呆れたように言った。

まあ、あれじゃそう言われるのも仕方ないよな。

「ま、あいつにはいい薬じゃて」

「ええ。しかしまあ、瑞獣でも入院したりするんですね」

事の始まりは、本当に下らない事だった。

ぶつちやけ、白澤様が中さんにぶつ飛ばされた。

それがいい感じに急所に入り、入院。

中さんは五道転輪王様に叱られたようだ。

「実際はただの検査入院で明日には帰ってきますけど」

「ふん、タイミングの悪い奴じゃ。ま、話し相手には事欠かんからいいがな」

「それって俺ですか？ 鬼灯様ですか？」

「両方じゃないかな？」

「はあ、一応私は忙しいんですが」

「まあまあ、少しはこの年寄りの話しも聞いてゆけ」

という訳で、このお茶会は始まった。

「しかしまあ、鬼灯殿は白澤によう似ておる」

「その話ですか。いい加減やめていただけませんか」

「鬼灯様ってその話本当に嫌がりますよね」

「ええ、あいつに似ているなんて不名誉極まる。最早侮辱以外なものでもない」

「そ、そこまで…」

「ん？ どうした鳳凰よ？」

「んー、そういうや昔にもこんな話を麒麟としたな」

「こんな話って、似てる似てないの話ですか？」

「ふむ、確かにあるの」

「どうせそれも私では？」

「鬼灯殿、やさぐれてますね」

「いや、その時は行動も含めて似てるなと」

あ、それは別人だわ。

「あれはどのくらい昔だったかの？あやつに人間の友人が出来たと聞いて、この鳳凰と見に行つたんじゃ」

「そしたら似た顔の二人が女の子をナンパしてて、麒麟と呆れた覚えがある」

そりゃ呆れるわな。

鬼灯様も不機嫌オーラ出してるし。

「まあ、その人間はその後身を固めて、嫁一筋になつたらしいよ？」

「そりゃ、嫁に尻に敷かれたんじゃ？」

「さあのう、そこまでは知らんわい。まあその後も付き合いは続いたようだな、白澤の奴はその人間に子が出来た時、まるで自分に子が出来たかのように喜んでおつたがの」

「へえ、そんなことがあつたんですか」

「あつたねそんな事。でもその後あいつすごい落ち込んだりしてなかつたっけ？」

「え？何ですか？」

「さあのう、あやつはその事は一切話さなんだからの」

「大方仲違いでもしたんでしょう。では失礼します」

鬼灯様はそう言い残して帰っていった。

「やれやれ、もう少し位ゆっくりしてゆけばよいものを」

「まあ鬼灯様も忙しいんですよ。そういや、その人間の友人って何て言う名前だったんですか？」

「んー、何て名前だったっけ？」

「そりや儂も忘れたわ。じゃがそやつの子供の名前は知っておるぞ？ 白澤のやつがさんざん言っておったからの」

「言つてた言つてた。吉兆瑞兆の『兆』だって」

病院のベッドに寝転がりながら、ふと昔の事を思い出す。

かつてね友人の事。

そして、友人を賊に殺された事を。

「あの頃はホント荒れたよな」

暫くは部屋に閉じ籠ったし、その後は彼を忘れるように女の子達にアプローチしたっけ。そして、

「あいつに、会ったんだ」

僕に、そして友に似たあいつに。

「一発でわかったよ。あいつの子供だって」

だから僕は決めたんだ。

鬼灯が困れば手は貸してやる。だけど、

「絶対に教えない。それが僕のケジメだ」

それが、僕のひねくれた決意。